

勝かつを知るに五あり。以て戦たたかうべきと、以て戦たたかうべからざるとを
る者は勝つ。衆寡の用を知る者は勝つ。上下の欲を同じくする者は
勝つ。虞を以て不虞を待つ者は勝つ。将、能にして君の御せざる者
は勝つ。故に曰く、彼を知り、己を知れば、百戦して殆うから
ず。彼を知らずして己を知れば、一勝一負す。彼を知らず己を
知らざれば、戦うごとに必ず殆うし。

【大体の意味内容】

勝つために知るべき条件が五つある。

一、戦ってもよいか、それとも戦うべきではないかを適切に知る者は勝つ。

二、兵力が多い場合の用兵と、少ない場合の用兵との違いを知り、使い分けられる者は勝つ。

三、リーダーと部下たちが同じものを求めて、一致団結している集団は勝つ。

四、自分たちは万全の準備をしつつ、（すぐに攻め込むのではなく）敵に不備が生じるのを待って有利に戦うものは勝つ。

五、将軍が有能で、君主は彼を信頼し、軍事に干渉しない国は勝つ。

したがって、次のように結論付けて言うことができる。敵の長所短所を知り、同時に自己分析も正確に行って自分の長所短所も知るならば、百戦連勝、負けることはないだろう。しかし己を知ってはいるが、敵についての情報不足でよく知らないならば、勝ったり負けたりするだろう。ましてや敵を知らず、己をも知らないならば、それはもう論外で、戦うごとに危険にさらされ続けることになるだろう。

世界でもっとも著名な兵法書、「孫子」を読んでみます。今から二千四百年ほど前、呉の国の將軍

孫武が原形を書き、子孫の孫臏そんぴんが体系づけたと言われる書物です。日本では戦国武将武田信玄の旗印「風林火山」が『孫子』軍争篇から取られたことが有名です。徳川家康もこの書を重視し、印刷刊行しています。フランスの英雄ナポレオンが『孫子』を座右の書としていたことは有名。第一次世界大戦を引き起こしたドイツ皇帝ウィルヘルム二世は、敗戦後に『孫子』を読み、「二十年前に読んでいたら…」と悔しがったそうです。

ここでは人間学の書として読んでみたいと思います。「戦略・戦術」的な話は、志望校合格への戦略・戦術として置き換えて読んでみると、案外面白いのではないかと思います。

この章については

「志望校合格のための五つの戦略」と読んでみます。

- 一、 受験するべきか、避けるべきかを知る。
- 二、 科目別の得点力に依じて、合格点到達のための予算を立てる。
- 三、 受験生本人と、サポートしてくれる人（家族、先生、先輩友人など）が同じ目標へ向けて当事者意識を持って取り組む。
- 四、 学習面だけでなく、心と体のケアも万全に。しかし当日に悪天候や感染拡大などの不測の事態も起こるので、覚悟をしておく（パニックにならない）。
- 五、 受験生本人が前を向いて本番に臨む。家族などサポーターたちは、受験生を信じて、心身のコンディションのケアだけを行う。余計な口出しはしない。

こんな感じはいかがでしょう。もちろん、原文を読んであなたたち自身が、自分にとってはこういう教訓だな、と自分流の解釈を試みたらよいと思います。今のはほんの一例として参考にしてみてください。

ともかく、実際の戦いでも、勝つためには相当いろんな準備をしなければならないことが、この書物にとっても具体的実践的に書かれています。単に力任せや数任せではダメなのです。実際の戦争でも、巨額のお金がかかるので、その配分計算は緻密ちみつに行わないといけません。単に兵力や武器をたくさんそろえればよいわけではなく、食料や衣料、燃料などの補給へいたん（「兵站」と言います）をいかに確実に整えるか、が実は最重要の課題です。

こうしたいろいろな側面について、自分はどんな状態か、敵のほうでは十分そろっているか、を知ることが必要だというわけです。

「彼を知り己おのを知れば百戦殆あやうからず」という超有名なこの言葉は、そういう意味として味わってください。